

## 信大で学ぶ皆さんに

細川 恒

長野県の高校教員になって十数年、「このままで教師としてやっていけるだろうか」という不安が私の中に生まれてきました。その不安を乗り越えるためには学問的な専門性を高めることや、教師として資質を高めることが必要だと感じていました。

ちょうどその頃、大学院派遣研修の制度が導入され、信州大学教育学研究科へ入学しました。大学院では古典文学の権威、滝沢貞夫先生にご指導いただき、信濃の伝説研究を重ねました。また、一方で小中学校の現職教員や現役の院生とも机を並べて、もう一度、教育とは何か、国語教育とは具体的にどうあるべきかについて考える時間を持つことができました。修了後も信大の先生方のご助力で、全国大学国語教育学会で公開授業をさせていただいたり、教育関係の学会や雑誌等で研究発表や寄稿の機会を与えていただきました。

大学院での学びを通して気づいたのは、学校教育について考える時に従来よりも大きなスケールが必要なこと、また、授業において一番大切なのが「うまく教えること」ではなくて、「生徒と一緒に悩みながら追究していくこと」の二つでした。特に国語教育に関しては、教材の背景にある日本文化はもちろん、近代日本をリードしてきた現代思想にいたるまで、いわゆる「国語」というジャンルを超えた「知」を体験し、自分で咀嚼していく大切さを知りました。

現在、ますます多忙化する教育現場で国語教師たちの多くが十分な教材研究の時間を持つことができず、指導書等を利用した表層的な授業の連続で毎日を乗り切っていく姿はやはり好ましいことではない気がします。大学生や大学院生の皆さん、時間に余裕があるいま、いろいろな知的体験や人間との出会いを積み重ねることをおすすめます。失敗も含めてそこで得たものは必ず教師となった時に生きてきます。失敗も教材になる、それが教師の魅力の一つかもしれません。

（ほそかわ ひさし 長野県松本蟻ヶ崎高等学校）